

V 街を支える

大項目		成果・課題	施策番号	概要版より抜き出した進捗状況等
V-1	都市の発展を支える拠点地区の整備	主な成果・実績等	(1) ②	環境首都総合交通戦略の一環として、拠点地区における駅のバリアフリー化や交通結節機能の強化などを行い、乗継ぎや待合環境を改善した。
			(2) ①	小倉記念病院の移転、魚町ジョイントアーケードの新設、あさの汐風公園の整備、クロスロード魚町、北九州市漫画ミュージアム、北九州屋台街・小倉十三区の開業といった事業が完了した。
			(3) ①	北九州学術・研究都市北部土地地区画整理事業では、その基盤となる宅地整備等を進めており、2011年度時点での事業進捗率は71.7%に達するなど、概ね順調に進捗している。
			(3) ②	北九州臨空産業団地整備事業では、生産・物流機能を持つ産業用地として、2011年度末時点での分譲率は97%に達している。
			(3) ③	2011年の北九州港における貨物取扱量は、最初に基本方針を策定した1999年と比較して約15%増加した。
		主な課題等	(1) ①	折尾地区総合整備事業は2022年度の事業完了に向けて筑豊本線トンネル工事や鉄道高架工事等に着手しているが、2011年度時点での事業進捗率は23%であり、やや遅れ気味となっている。
			(2) ②	商店街エリアを中心とした歩行者通行量は18,513人で、目標値に到達していないが、空き店舗率は着実に改善しており、居住人口についても目標値を達成した。
V-2	交通・物流基盤の機能強化とネットワーク化	主な成果・実績等	(1) ①	空港貨物取扱量については、リーマンショックの影響を受けた2009年度を除き毎年増加している。また空港貨物チャーター便の就航数も2011年度は13便と前年を上回るなど、「北九州空港航空貨物拠点化推進事業」の成果が着実に実を結んでいるといえる。
			(1) ③	「内航フェリーモーダルシフト推進事業」を実施し、各フェリー会社に利用台数に応じた補助を行った結果、フェリー利用台数は目標を大きく上回った。
			(2) ①	新若戸道路や国道495号などの整備を推進し、また黒崎バイパス及び新若戸道路と都市高速道路との接続により、広域的なネットワークの強化を図った。
			(2) ②	大門木町線、中央町穴生線、国道3号砂津拡幅などの市街地の幹線道路の整備により、交通の円滑化が図られ、市民にとっての交通利便性の向上につながるとともに、産業活動への支援につながった。
			(3) ①	市民意識調査によると、市内の公共交通機関での移動は便利だと感じる人の割合は増加している。
		主な課題等	(1) ①	北九州空港の年間利用者数は、名古屋線、那覇線、上海線、ウラジオストク線の相次ぐ運休により減少しているが、2012年度は旅客数が約127万人(前年度比8.4%増)で2006年度に次いで過去2番目の多さとなった。
			(3) ②	「おでかけ交通事業」を市内の4地区で実施しているが、採算性が非常に厳しい中、廃止に至ることなく継続的な事業展開が行われている。
V-3	都市基盤・施設の効率的な活用・整備	主な成果・実績等	(1) ②	公共施設の適正な維持管理及び維持管理コストの縮減については、2004年度から2010年度の累計削減額は約35億円に達した。
			(2) ①	市営住宅のバリアフリー化工事(すこやか改善事業)を行い、最終目標としている約10,000戸のうち、2011年度までの実績は累計で3,077戸になり、概ね順調に進捗している。
			(2) ①	北九州港集貨・航路誘致事業では、国内外の船会社や荷主、物流事業者、メーカー等への企業訪問や視察会、セミナー等のプロモーション活動等を通じて、北九州港への航路誘致活動や集貨活動を行ってきた。
			(2) ②	未利用の公共施設の転活用が困難なものについては、財源の確保を図るため積極的に売却に努め、2011年度の土地の売却額は目標額を上回る25億円を達成した。
			(2) ③	市民との協働による景観づくり(木屋瀬地区修理・修景支援)では、記念館の整備や道路・公園・散策路・サインの整備など様々な取り組みの効果によって地域住民の意識が向上し、2012年4月には、歴史的な街並みの保存・形成を継続するための建築協定地域が再締結され、現在は新規を含め5地区となった。
		主な課題等	(1) ①	整備する段階で将来にわたっての維持管理コストを圧縮できるような、従来とは異なる新たな整備手法についても積極的に検討していくことが課題である。
			(2) ③	文化財公開施設への入場者数は、2009年度には年間33,635人(目標値:36,500人)、2010年度には年間30,820人(目標値:37,000人)、2011年度には29,533人(目標値:37,000人)となるなど、入場者数は年々減少しており、進捗状況としては、やや遅れ気味である。